昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可
昭和六十年五月十五日　発行（毎月一回・十五日発行）

慈光

第三十七巻　第五号
（通第四三〇号）

目次

真如法性身……近角常観……(1)
親鸞聖人と私……池山榮吉……(4)
他力の信心こそ大菩提心……西元宗助……(10)
聞法の悦び……村上速水……(15)
木村無相師の書信(二)……岩崎成章……(20)
——自覚について——
弥陀の誓願のたのもしさ……花田正夫……(23)

真如法性身

近角常観

阿弥陀仏は吾々が無明の闇を迷うて居るのを哀れむ大悲で出現せられたというが、そも〳〵このことは何を意味するかというに、例えば、ここに酒に酔い伏して夢みる人を、今醒めた境涯の人より可哀想で捨てて置けぬ故、声を掛け揺り起し、呼び醒まし、見捨てぬ慈悲で向って下さるのであるが、酔っている人間の方からは、いつかの昔から酔い伏しているのであるが、醒めた境涯の人達は疾うの昔からさめているのであって、何時目がさめたも何もない。永劫の昔からさめている、始なく終なき広大な目ざめた境涯であるが、眠っている人間の永劫の眠りがいつまでも醒めようがない故に、それが捨てて置けぬので呼び醒まさずにはいられないとなって来るのである。そこでその始め無く終り無き、醒めたる広大な境涯が仏の法身の境涯である。

処でここで注意せねばならぬのは、真如だの、法性だの、法身だのという時は、私がそうであったが、すぐに世界宇宙の問題を引きつけて考えやすいのである。即ち宇宙の主体が真如であると考え、世界の実在が法身であるという風になりやすいのである。然るにこれがそうした世界宇宙の理窟になる時は、法身と報身との連絡がつかぬ。私はこれに困ったのであった。それは私も初めはそうした道理理窟を考え、それで充分解っていた積りでいたが、一度煩悶に陥入ったとなると、今迄考えていた法性も法身も、そうした道理で考えていたことは、ことごとく絵に画いた牡丹餅で、一つも私の苦しい腹をみたしてはくれぬ。こうしていよ〳〵迷いに迷いを重ね、苦しみに苦しみを重ねたのであったが、即ちそれは実際問題で、人と争い隔て如何ともし難い立場になったのであるが、それがいよいよ最後に救われたのは、そういう暗黒に迷うている私を哀み、私がその如く我慢深く、どこまでも隔てて行くのは、どこまでもどうにもならぬ心を先方から見抜かれて広大な慈悲で臨んで下されたと、そこに私は慈悲心で安心することが出来た。

その時過去を顧みると、真如とか法性とか云っていたことはまるで意味をなさぬ、故に或時はこうした言葉が恨めしく、終にはかの『信仰問題』の中で「啓学の研究が仏教信念の助長でなくて害毒」とまで極言した時代もあった。

即ちそれ程に理窟で作っている信仰は、悩みのために砕かれてしまうのである。かくして悩み苦しんで、仕方のない時に、その苦痛が開けたのは、その苦悩を哀れむ慈悲、同情の心が徹した所で、私は安心させて貰ったのであった。故にそこになると、慈悲ばかり、大願の思召ばかりということになるのであるが、その慈悲、恵み、思召なるものは如何にして来たかとなると、実はその広大な心は、その苦を脱れ、解脱した、本覚明了の、目のさめたる境涯の人が、その境涯から酒に酔い伏し、夢見ている人間を見ると、哀れでじっとしていられぬ故、その慈悲が起って来たのである。若し真の目ざめたる処の人ならば、傍に如何に夢見て苦しんでいる者があろうが、捨てて置くのなら、真の目醒めた人とは云えぬ、自分が救われたから安心したといって、人が苦しんでいるのを平気で見ているのなら真の解脱を得た者とは云えぬ。真の解脱者は苦しんでいる者を見れば、それを呼び起す慈悲が起って来なければならぬ訳である。その目のさめた境涯が即ち法性、法身、真如、仏性、解脱、涅槃である。

故に法身ということを道理理窟に考えぬようにしなければならぬ。これはよく聞かれる問題で、近頃は多くの人が仏書を読まれる、現に此間もある友人の如きは親に別れて仏書を見るが、どうもここの処が分らぬとて相談に見えたのであった。その分らぬのはここを理窟に考える処にある。殊に現代の青年は真如法性を自ら証ることのように考える。すると慈悲に救われて安心するなど、何のことだか分らぬというのであるが、それが人生の実際問題に当った時は忽ちに砕けてしまう、その時初めて慈悲に出遭うのである。そこで初めて真如法性の真の字も嫌になるというのである。

私が始めてこのことに気付いたのは親に別れた時であった。平生はお慈悲ばかり喜んでいたが、いよ〳〵親が最後の病気の時、百方手を尽して親の病を助けんとして、手が届かず、老病で死なれたのであったが、そのいよ〳〵別れた時、如何なる思いがしたかというと、「いよ〳〵仏の世界に導かれて参らせて貰った」と、これを深く思ったのであった。さて親の病気が助けられぬ。こうなると、その親はどこに行かれるか、あゝ広大な慈悲に救われて、親は仏の側に参らせて貰い、仏の境涯に行かせて貰ったと、これが私の心に出て来た故、そこで初めて私は未来思想を明にさせて貰った。それまでは未来のことは言わなかったのであるが、親に別れて、親が救われて仏の境涯に行かせて貰われたとなって初めてそれを知らして貰ったのが彼の『慈

光録』にある「父の示寂によって教えられし真実証の霊境」なる一文だったのである。親鸞聖人は仏の慈悲を頂いてその結果この身体が亡くなって真実証に入るのだと云われているが、正しく私の父がこの肉身を終え、その境に行かせて貰うと、身を以てそこを示して下されたと、ここの処を明にさせて貰ったのでした。換言すれば今迄喜んでいた慈悲は、親も存生中一代喜んで見せて下され、さていよいよ死に際して、死して参らせて貰う仏の境涯の有様を知らせて下さったのであった。私はそこを分らせて貰って、親鸞聖人が「蓮華蔵世界に至ることを得れば、即ち真如法性の身を証す」といわれているが、成程これが真如法性の広大なる仏の境涯であったと、初めてここに気づかせて貰ったのであった。

釈尊が八十年間種々の行化を垂れさせられて、いよ〳〵バッタイ河畔で滅を現じ、涅槃の都に隠れ給わんとした時に「色身は滅すと雖も法身は滅せず、如来は常住にして変易することなし」と、応身の釈尊が法性常住の境を示されたと同じ様に、私は親に別れて成程今日慈悲を喜ばして貰うと云っていても、如何にしても親が助けられず、天に地に失望せねばならぬ人生であるが、今や親はいよ〳〵この界を脱して真実証の境涯に往かせて貰われたと、そこへ考えが出て、即ち真如法性をかく生命の終る方より気をつけられたのであった。

そこで最後に注意せねばならぬことは、親鸞聖人が「形ましまさぬ仏」とある。これがよく問題となるのである。即ち吾々がすがる仏でなくしてならしめんと誓って下さった仏である。ならしめて下さる仏とは、吾々が現在生活の境涯なり、想像を加える形ある境涯ではない。形を超絶した広大の境涯である故に自然と申すのである。今斯く現にこの肉身を持ち、苦悩を重ねている吾が、親心を知らされ、肉体を終った時に、行く真の証りの境地である。故に真如法性とはこれを吾々の信仰の対象と考えてはならぬ。それは吾々の救われて生れる処の証りの境涯である。

明治三十三年正月元旦の朝に入り
小説『野菊の墓』を
手紙県　め　ぐ　み　伊藤　左千夫

天地のめぐみのままにあり経れば月日楽しく老を知らずも。
天地のめぐみのなごみ思ふ時足らはぬこころ毫末（けのすえ）もなし
よきも着ずうまきも食はずしかれども児等と楽しみ心足らへり
おのづから我を傾け父親の心たぎれば世は楽しかり

親鸞聖人と私

闇より光へ

「かなしきはあくなき利己の一念を、もてあましたる男にありけり」（啄木）

あの時の私の気分は丁度そんなものだった。

放逸な欲望に捕まれて、そのさいなみから逃れようと、もがく気さえも挫けてしまった。

従来若存若亡のたよりない状態になった仏の幻影は、無論このときも消えていて、仏とは人間の妄想が造り出した概念に過ぎない、と思いきめなければならなかった。日頃出にくかった念仏が、てんで出て来ないばかりか、何方に向って遁路をもとめたものか、その見当さえつかなかった。

外界のまゝになる、ならないはさておいて、自分で自分の心をどうすることも出来ないとは、この時つく〴〵おもい知られた。

自分の腑甲斐なさに思い到ると同時に、これまで私が生涯の目的として絶えず追及して来た名誉というものが問題

池山　榮吉

となって、結局自分は残念ながら、到底名誉を背負う資格がない——その主体となるべき自分が無力だから——とあきらめなければならなくなった。

目的のなくなった人生！　何たる味気ないものだろう。

名誉などと、そんな浮いた話をしている場合でない。今現にこう悪い心がむく〳〵と起きて来て、それを押えつけようとする良心が、ピシ〳〵はねかえされる始末では、私の究極の運命は、この世からなる永劫の地獄の外にない。

私は絶望と恐怖そのものであった。人なき空曠の遥かなるところに、悪徒猛獣毒虫に追いつめられた二河白道の旅人は私であった。

あゝこういう時に本統の信仰があったならと、強烈な真信の願求に、息ははずみ、胸ははりきれんばかりになった。迷子になった幼児が、あわただしく母を尋ねるように、いらだった心は、今度こそ真の仏を見つけようと、狂わしいまでにあせった。

すると――真暗闇のなかに一点の光が浮び出たように――不図胸にうかんだのが「親鸞におきてはただ念仏して弥陀にたすけられまゐらすべしと、よき人の仰せをかうむりて信ずるほかに別の子細なきなり」の文であった。

二河白道を前にみて、進退きわまった旅人の耳にはいった東岸発遣の声がそれであった。私の眼はこの文に見入った。私の耳はこの文に聞いた、私の心はこの文に凝った。

その刹那、焼石が水を吸いこむように、心の奥までこの文が浸み透った。西岸上の招喚の声が聞えたのであろう。私は心にある衝動を感じてハッと我に返った。信仰の門を開く手がかりが見つかったのだ。

私は親鸞とあるのを私と読んで、よき人とあるのを親鸞聖人と読んだ。そしてその文を口の中で繰返したかと思った途端！ドッと念仏が口を衝いて出た。滝のみなぎり落ちるような勢で、しかもかって覚えのないやすらかさを以て。

今迄心を占めていたやるせない淋しさはいつしか消えて、何とも云えない頼もしさが心の底から湧き上るのを覚えた。これが他力の真境だな、とはじめて知ったときの心地！広大難思の慶心とはこれを云ったものか、体験の上から推知される。

こうして直接親鸞聖人の御手引によって、大悲選択の願心にひきあわされ、たゞ念仏の心のおこると共に、心光照護の境に置かれた。これが私の四十二のときであった。

「平生のとき善知識の言葉のしたに、帰命の一念を発得せば、そのときをもて娑婆の終り臨終とおもふべし。」世にいう厄年に「前念命終」を体験して、それから今日まで、「後念即生」の日暮しをして来たうちに、不思議の一つに数えられるのは、以前口に出にくかった念仏がやす〳〵と称えられることと、仏の存在――体験後にあっては特に阿弥陀仏の存在――が、もう問題に上らなくなったことで、これが白道を蹈んで疑怯退心を生じない他力の金剛心――有漏の穢身に宿る――というものかと、われながらそぞろに勿体なく思うときがある。

「唯念仏の衆生を観はし、攝取して捨てざれば、阿弥陀と名づけたてまつる」濁悪の群萌を悲引したまう如来、私達に間に合う唯一の御名。どうして南無阿弥陀仏を称えずにいられよう！

内に我心をみつめる

去年の暮頃であった（大正十年）明けて来年は開宗七百年に当るそうだが、どうかこの機会に、聖人を手に取るようにあり〳〵と、自分も拝見し、人にも紹介したいものだ。それには一体どうしたらよいだろうかと、ぢっと思案をこらしたのであった。

それには『御伝鈔』をはじめ、だん〳〵文献もあるようだが、それらを一々調べて見ようかと思った。が、それは私にとっては随分大仕事だし、よしやって見たところで、果して私の想ってるような聖人が現前されるかどうか？まだ手もつけないうちから、はやくも疑が崩したのであった。

本統に専門的に立入って深く研究したならいざしらず、い、加減の素人詮議で、ありふれた材料から、聖人の人格がこまかに、正確に、生々と、浮彫にしたように顕われて来ようとは、とても思われないことであった。

いにしえのなべての聖賢とか、偉人賢士とかにしてみれば、私達は聞いたり読んだりして、多かれ少かれ知ってるだけの材料で、趣味と必要のある限り、略その人柄の輪廓を想定する。それが私達の聖賢とか偉人賢士とかに就いて知ってる全分であって、私達はその想定に対して――気に入ろうが入るまいが――別に異議をさしはさむべき理由がない。が、聖人にしてみると――人はいざ私には――そうは行かない。私が聖人の筆に、口にせられた文言を知っているのは――少くともその深さに於て――僅なものだ。聖人の御伝記については、殆んど知ってるとは言われない。二三文献を読んだことがあるが、どれだけが果して歴史的に正確なものかを考えたこともないのだから。

それでいて私には――一斑をみて全貌をしるとでもいったものか――聖人が可成わかってるような気がする。これこそ的確な史料によって調べあげた結果だと主張する者があっても、若しその結果が、私の想ってる聖人と違えば、それが間違ってると、先天的な断定をさえ下しかねない確信がある。実をいうと私は古来はもとより現代でも、聖人ほどにわかってる人格はないのだ。

私はどうしたら聖人をあり〳〵と拝見することが出来るかということを、間がな閑がな、とつおいつして考えた。この揚句に、或時フト想いついたことがあった。そしてその思付を、再び考一考した刹那、微笑が唇辺にたゞよって来るのを覚えた。それは外のことではない。まことの聖人を拝見しようと思えば、眼を外にばかり向けていては駄目だ。内にわが心をみつめると、そこにチャンと控えておいでになるということだ。これがその問題の解決として適当かどうかは知らないが、本統の聖人は、この方法を外にしては拝見出来ないということだけは確におもえた。惟うにこれは別段珍しい思付ではあるまい。恐らく昔からそれと明言した人もあろうし、現にそう感得してる人も多々あろう。たゞ私としては、あちこち探し廻った揚句、ようよう聖人の在所をつきとめた自身の実験が、灯台もと暗しの譬も思い合わされて、可笑しくもあり、尊くも感じられる。

この実験から、対聖人の関係が革新されたとは思えないが、従来よりも一層緊密を加えた、むしろ融けて一つにな

った。と言った方が実感に近いかも知れない。

「一人居て喜ばゝ二人と思ふべし。二人居て喜ばゝ三人と思ふべし。その一人は親鸞なり」の文にしても、以前は私が一人で喜んでいると、聖人もすぐ傍に居られて、一緒に喜んで下さるのだ、とばかり思って居たのであったが、聖人の在所が知れた今では、私の喜ぶ心の内に、聖人の御喜びも流れているからは、私の喜ぶ心、即、聖人の御心といただける。

「その一人は親鸞なり」のお言葉は、私達の喜ぶ時ばかりでない。私達の歎き悲しむ場合にも、怒り狂う場合にも、その他煩悩具足の凡夫として、さま〴〵の浅間しい情を馳せる場合にも、母の子を思うような憐念の意味で繰返される。「親鸞もこの不審ありつるに唯円房おなじこころにてありけり」すべてがこの調子だ。何のことはない、私達が迷い歩いて途方にくれそうな辻々には、チャンと先へ廻って待って居て下さるのだ。

煩悩具足の凡夫と「かねてしろしめして」身を苦毒の中においても、飽くまでも見捨てぬ大悲の悲願を、体現された聖人なればこそ、こうも徹底した同感の態度に出られるのだ。

「踊躍歓喜のこころもあり、いそぎ浄土へまゐりたくさふらはんには、煩悩のなきやらんと、あやしくさふらひなまし」とあるのも、隔てのやまない私達の逃げようにも逃げられないように、物見の上で見張って居て、声をかけて下さるので、雲居寺の阿弥陀仏が、逃げる人の袖をとらえたという夢想も思い合わされる。

「悲しいかな愚禿親鸞、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚の数に入ることをよろこばず、真証の証に近づくことをたのしまず、恥づべし、傷むべし」と、聖人の嘆きをうけたまわっては、罪業の織り出す幻影にあこがれて「あたら身を仏になすな花に酒」と、苦悩の旧里を楽とさえ見る錯覚に弄ばされる無慚な自分を見出さずには居られない。

「弥陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそくばくの業を持ちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」何たる深刻な充実した真情の流露だろう！「よき人の仰せをかうむりて」信じたまうた際に、深く深く刻まれた自己内面の披瀝とうかがわれる。私達にはとてもそんなに周到で完全な、而も簡短で的確な、嫋々たる余韻を含む言いあらわしは出来ないにしても、心に思ってる内容は実際その通りに相違ない。だからこの聖人の常の仰せは、私達の述懐としてそのまま借用して差支ない。

総じて聖人が御一身にかけて仰言ったことばは、聖人に

してみれば、たゞ御自身のお感じを述べさせられたにとゞまるのだが、私達から見れば、そのお言葉がこのまま私達への御さとしとときこえる。而もそれが煩悩熾盛の衆生として私達と同じ立場からの仰せだもの、私達の心に強い響を与えるどころか、私達自身の内心の叫としかきこえないことがあるのは、固よりその所と言わなければならない。

「なにごとも、こころにまかせたることならば、往生のために千人殺せと云はんに、すなはち殺すべし。しかれども一人にても殺すべき業縁なきによりて害せざるなり。わが心のよくて、殺さぬには非ず。また害せじとおもふとも、百人千人を殺すこともあるべし」「さるべき業縁のもよほせば、いかなる振舞もすべきぞかし」「わろからんにつけてもいよ〳〵願力を仰ぎまゐらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこころもいでくべし。すべてよろづのことにつけて往生にはかしこきおもひを具せずして、たゞほれ〴〵と弥陀の御恩の深重なることを、つねにおもひいだしまゐらすべし。しかれば念仏もまうされさふらふ」唯円房はたびたび聖人からこういう風に聞かされていたに違いない。

善いことをしたいにもしおうされず、悪いことをやめたいにもやめられず、二六時中善悪の思うようにならないのに苦しんでる私達、七百年後の私達に、どれだけこのおさとしが、たよりになることだろう！「悪からんにつけても

化卷 辱

いよ〳〵願力を」仰ぐようならされた私達に、柔和忍辱なり、勇猛精進なり、臨機に当為の心が出て来ようとあるのは、煩悩の氷を菩提の水に溶かす大信海の転化作用とも謂うべきもので、この作用あればこそ、私達は「ただほれぼれと弥陀の御恩の深重なることを、つねに思ひ出しまゐらせて」わがはからいをはなれた自然法爾の妙境に自適して、底力のある生活をさせていたゞけるのだ。

「流念難思法海」とは、こうした日常生活の推移を言ったものと解せられる。他面「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とよき人の仰せに信順したところが、即「樹心弘誓仏地」に違いない。心が一旦弘誓の仏地に樹てられた上は、念は自から難思の法海に流れて行く。聖人のおよろこびは、すなわち私達のよろこびだ。

聖人のお言葉をこういう風に並べ立て、一つ〳〵味わって行っては際限がない。

要するに聖人のお言葉——それは悲嘆のであれ、感謝のであれ、将た解釈であれ、勧誡であれ——一々みな私達に——随分意地わるく批評の眼を以て見る癖のある私達に——そのまゝ受入れられる。これは実に驚くべき、他に類例のない不思議なことだ。

ところが、それよりもっと不思議なのは、私達が勝手なことを思ったり為たりすることが、きっと聖人の何れかの

お言葉に関連して考えさせられることだ。「ながむる人の心にぞすむ」とは聖人にもあてはまる。――これはどうでも私達の心と聖人のお心とが一つになっていて、私達の心の隅々まで聖人の御心が充ち満ちている結果とみるより外、解きようのない謎だとおもう。しかしまた飜って考えてみれば、そうあるのは当然のことだとも思える。私達には、聖人は私達と同格の凡夫として、横超の真教をひろめるために、この世に来化したまうた弥陀としか思えないから。

衆生の成仏のために、自分の成仏を賭けられた無碍絶対の仏心と、功徳の体となるという煩悩成就の凡情とが、信楽開発の時尅の極促を合図に、一つに融け合うのに何の不思議があろう！

多生曠劫この世まであはれみかぶれるこの身なり
一心帰命たえずして、奉讃ひまなくこのむべし。

子の母をおもふがごとくにて衆生仏を憶すれば
現前当来遠からず、如来を拝見うたがはず。

尽十方無碍光の大悲大願の海水に
煩悩の衆流帰しぬれば、智慧のうしほに一味なり。

源信僧都の御歌

大空の雨はわきてもそそがねど　うるふ草木はおのがさまざま

我だにもまづ極楽に生れなば　しるもしらぬもみなむかえてん

夜もすがら仏の道をもとむれば　我がこころにぞたずねいりぬる

暁のかねのこゑこそ嬉しけれ　長きうき世のあけぬとおもへば

古ほおのがさまざまありしかど　おなじ山にぞいまはいりぬる

しづかにて法とく人ぞたのもしき　われらみちびく使とおもへば

他力の信心こそ大菩提心

――法然上人から親鸞聖人へ――

西元宗助

親鸞聖人のご生涯は「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀に助けられまいらすべしと、よき人の仰せをかふむりて信するほかに別の子細なきなり」『歎異抄』と、仰せになりましたように、法然上人を、よきひと（善知識）とあおがれたご一生でありました。事実聖人は晩年になるほど、いよ〳〵深く法然上人を敬慕なさったようでございます。

しかし、法然上人と親鸞聖人とでは、こんにちの浄土宗と浄土真宗にみられますように、その教説において多少の相違と展開があるのであります。

何故にそうなったのか。そのことを明らかにいたしますために、そして私共の信心を確かめますために、わたしの気づいておりますことを四点ばかり、申してみたいと存じます。

一つは、聖人の聖徳太子に対する深い〳〵お気持でございます。聖人のご生涯は太子を離れては考えられない。げんに聖人は、太子を「和国の教主」とまで仰がれて『皇太子、聖徳奉讃』和讃を百余首もご製作になったほどでございます。それに対して、法然上人はこの様なことはない。

それでは何故に、聖人はこのように特別に太子を尊崇し、帰依せられたのでありましょうか。それは、聖人二十九歳のおんとき、道を求めて山を下り、太子に御縁の深い京の六角堂に百ヶ日参籠され、その折の夢告によって、生涯の師、法然上人に邂逅された、それによることもございましょう。しかし、わたし思いますに、太子によって仏法がわが国に伝来され、しかも太子が在家止住のお姿で大乗仏教を体得せられた、そのご恩徳を景仰されてのことであることが、聖人のご和讃によって拝察されるのでございます。

二つには、法然上人、殊にその門流となりますと、臨終来迎往生に重きをおく傾向があるのに対し、聖人の強調せられたのは現生正定聚であり、平生業成でございます。この点もまた対照的であると申さなければなりません。そのためでありましょうか、注目すべきことに、浄土宗には

上人ご入滅後から明治初年にいたるまで、『〇〇往生伝』と名づける書籍が、わたしの調べただけでも七十冊近くもあり、その中には入水往生伝をも含んでいるのに対し、真宗の系統には往生伝と題せられた書籍は一冊もないようでございます。そして、その代りにと申すべきでしょうか、信者の「生きざま」を述べた「妙好人伝」がございます。すなわち法然上人の流れが宗教的な「死にざま」を非常に重要視するに対し、親鸞聖人の流れは、平生業成を宗旨としておりますだけに、平生において、如何に聞法して信心を獲得するか、そしてまた、念仏者として如何に仏恩報謝の日暮しをして責務をはたすかという「生きざま」が中心の問題となるのであります。

三番目の相違点は何かと申しますと、徳川時代以来、いわゆる被差別部落の人々の多くが、浄土真宗の門徒であることでございます。そして親鸞聖人には、その著『唯信鈔文意』に「愚縛の凡夫、屠沽の下類」さらには「いし・かわら、つぶて（礫）のごとくなるわれらなり」というお言葉がございますように、当時のわが国の最底辺の人々を同悲し同苦し給うたことが、聖人のお言葉のはしばしにうかがえるのでございます。それに対して、浄土宗は、法然上人は〝一文不知〟の人々に対して深い愛情を持たれたのでありますが、しかし浄土宗はあまり被差別部落とは関係がなく、むしろ徳川幕府と深く結びついたのであります。このような両者の相違は、何によるのであるかと思うことでございます。

そこで今まで述べてまいりました法然上人とその弟子親鸞聖人の相違の由って来たるもの、その多くは私の見るところでは、法然上人のまさに仰せになりたかったところのもので、たゞ時機がまだ十分に熟していなかったがために、あるいは思い及ばなかったが為に、仰せになることの出来なかったところのものであると思われるのであります。それをご開山聖人は、法然上人の御思召しの底にある如来のご本願を仰いで、末法の時代相応に展開されたがための相違であると思われるのでございます。それで聖人の教説が、法然上人のそれから、どのような事情で展開されねばならなかったかを、以下、いささか述べてみたいと思うのでございます。

まず第一に、法然上人は、したがってまた今日でも浄土宗では、浄土真宗のような「信心」のことを、それほどやかましくは言わない。それに対して真宗では、信心の異なるものを異安心として、ときには厳しすぎるほどに問題にする。それは何故かといえば、お念仏を称えるからと云っても「必ずしも願力の信心を具する」とは限らないからでございます。げんに願いごとをかなえて貰いたいための打

1133-1212

算的な祈願の念仏もあるからでして、それでは本当の仏教——仏法にはならない。それに、親鸞聖人におかれてはどうしても真実信心を明らかにしなければならない内面的な要求が切実におありだったのでございます。すなわち、本願の念仏に基づく他力の真実信心を明らかにして、その信心こそが、金剛心であり、大菩提心であることを証明し、これから述べますように、明恵上人ら聖道門の学匠たちの、法然上人と浄土教に対する根本的な誤解をとき、上人のご無念を晴らし、上人の御恩に報いたいという熾烈なる念慮が、親鸞聖人におありであったからでございます。

そも〳〵法然上人は、平安末期の混乱した源平の時代に出られて、動乱の中に苦悩する無知の民衆のため、「ただ南無阿弥陀仏と申せば、うたがいなく往生するぞ」（一枚起請文）と、ともかく本願の念仏を称えることを仰せになって、浄土教を聖道門から独立させられたのであります。

これは仏教史上、まことに画期的なことでありました。それだけに当時の仏教界において大問題となりました。殊に法然上人の浄土教——当時ではまさに新興仏教でありましただけに、一般庶民の男女からも圧倒的な支持と帰依をえたものですから、南都北嶺の旧仏教側からの反発と嫉視は猛烈であったのでございます。また法然門下のなかには無思慮な言動をするものもあって、世間の誤解を招くこともありました。このようなことのため、皆さまもご存知のように興福寺衆徒らの訴えとなって、念仏停止、そして法然上人以下十名前後のものが、流罪または死罪となったのでございます。

この時のことを聖人は、「主上・臣下、法に背き義に違し、忿を成し、怨を結ぶ」（教行信証、化土巻）と、無念と怒りと悲しみをもって述べておられます。「主上」とはいうまでもなく天皇のこと。天皇もまた「法に背き義に違し」と、わが国の高僧の中で、このように厳しく名指して天皇を批判した方はわが国の歴史はじまって以来、聖人をもって嚆矢とするのでございます。

ともかく、それほどに親鸞聖人にとりましては、かの、「承元の法難」は恩師法然上人に対する聖道門の人びとの誤解をなんとしてでもとかなければなりません。殊に法然上人の主著『選択本願念仏集』に対する栂尾の明恵上人等、当時の聖道門を代表する高僧たちの批難にこたえなければなりませんでした。というのは、法然上人は、新しく独立した浄土門の立場を強調したいあまり、善導大師の有名な「二河譬」の中の「群賊悪獣」とは、聖道門の雑行雑修自力の人びとであると、つまり菩提心がないのに菩提心があると思いこんでいる人びとのことであると仰せになったこと。そしてその反面、菩提心のないと歎く純心な一文不知

の人びとこそが、本願念仏のお助けにあずかるとお説きになったこと、これらのお言葉が、明恵上人らを非常に刺激した。そのため明恵は『摧邪輪』を著わして、法然上人は「菩提心を捨て、しかも聖道門を群賊に譬えた」として慎り、法然の念仏宗は、要するに謗法の邪教であると徹底的に非難したのであります。

このようなことが、法然教団に対する弾圧、不当な念仏禁止と法難の背景にあったわけでございますから、親鸞聖人としては、師匠の法然上人への誤解をといて、その冤罪をどうしても晴らさなければならない。そうして苦悩する民衆のための真実の仏法である浄土教を弘めて、師恩にこたえなければなりません。それこそが聖人に課せられたる〝念仏者の責務〟であり、使命であったのでございます。

まさにそうであればこそ、親鸞聖人は法然上人の「ただ念仏」の教えをうけついで、「ただ念仏」ということの真意、すなわち真実信心ということを厳しく仰せにならざるをえなかったのでございます。そして真実の信心、すなわち他力の信心こそが、まさに真の大菩提心であることを明証されねばならなかったのでございます。

ところで、他力の信心こそが真実信心であり、金剛心であり、大菩提心であることを明らかにするためには、そして明恵上人らをして真に納得せしめるためには、どうしても真実の信心は、自力の信ではなく、願力廻向の信心、すなわち「如来よりたまわりたる信心」（歎異抄）であることを明らかにされなければなりませんでした。そしてそれが、聖人のかの有名な「三心一心問答」であり、「三願転入」であるのでございます。このことは、聖人の主著『教行信証』の「信巻」に懇切に述べておられることでありまして、わたし如きものの紹介しうることではございません。しかし皆さまのお導きをいただきますために、この中の「三願転入」という大事につきまして、あえて私自身の領解するところを申し述べてみたいと存じます。

そもそも、三願転入と申すことは、聖人ご自身のご己証の表白でございます。しかし又それだけに、私どもと決して無関係なことではなく、如来の大悲が、光明・名号となって、われら無明煩悩しげく罪業深重なるものに、切々として徹到する様相を示されたものと承っている次第でございます。すなわち如来大悲のお名号の導きによりまして、われら無明の群生が、自力我執のわが身のための第十九願海から、願力をたのむようでありながら、やはり自力にほだされている第二十願海をへて、果遂の誓いにより、ついに本願他力の第十八願海に帰入させていただく、その大悲の風光を述べられたものと、感銘深くいただいている次第であります。

そういえば、想い起すことがございます。かって私、ある年ごろに、われ信心を得たりと、有頂天になっていた時期がございます。しかしそのうちに、当然のことながら、これはどうもおかしいと、自己嫌悪の念に襲われはじめました。それと申しますのも、この自分が如何にも信仰者顔をし、他人の行動を見下している。煩悩具足の凡夫と、口先では殊勝気にまことしやかに言いながら、あきれたことに〝われは悪し〟と思う心は全然なく、そのくせ高慢にも人さまを凡夫、いや悪人扱いにして平然としている。お念仏を申しても、その念仏に、煩悩の炎の火消し役をやらせて、ともかく、心底では、なんとかして聖人・賢者・善人・名士になりたいという思いを焦している。この自分が。

このような、まことに釈然としない心持ちで、あるとき、福島政雄先生を訪れたのでありました。すると先生、「なぜ、そんなに憮然とした顔をしている」と仰せになりましたものですから、いま申しましたような、どうにもならない心境を申しあげて、「わたしの信仰は、まだ極めて不徹底で、いわば二十願の若存若亡かと思い悩んでいるのです」と重ねて申しますと、先生即座に、「それは有難い、かりに二十願の世界であるとしても、二十願もまた如来の悲願、ことに聖人は『果遂の願』とも仰せになっておられる。ところでこの私は」と一息おつきになって、「いま現に助かりようのないわが身でございます。ただ如来のお喚び声のお念仏ひとつに生かされております。あなたも、そうおありなのではありませんか」と仰せになりました。

その時の先生のお顔の光り輝いておられたこと、そしてそのときの感動のお念仏は、今もなおわが身にございます。真実の信心とは如何なるものであるかということも。

さていよ〳〵私の拙い感話も終えるときがまいりました。ところで親鸞聖人は、他力廻向の真実信心こそが大菩提心であることを如実に明らかにするために、『教行信証』の、「信巻末」に、『涅槃経』の「梵行品」をなが〳〵とご引用になりました。すなわち、末代の罪業深きわれらを代表する阿闍世が、大悲の月愛三昧（念仏三昧）によって、他力の「無根の信」をえたるとき、阿闍世は、その信心歓喜の中から、次のように釈尊に表白しているのであります

世尊、もし、われ明らかによく衆生の諸悪の心を破壊せば、われ、つねに阿鼻地獄にありて、無量劫のなかに、もろ〳〵の衆生のために苦をうけむとも、もって苦とせず。

（以下十九頁下段に）

北海道 1922
旭川

聞法の悦び

昭和五十八年

(一)

私の今年の年賀状には、日頃お世話になっている人びとに、次のような言葉を書いて送った。

〝頌　春

「一生を終えてのちに残るのは、われわれが集めたものではなくて、われわれが与えたものである」

数年前、ある小説で読んだこの言葉が、珠玉のように思われるこの頃です。今年はこの言葉をモットーとして、生きてゆきたいと思います。　合　掌

昭和五十八年元旦〟

実は「ある小説で読んだこの言葉」というのは、十数年前、『朝日新聞』に連載された「氷点」という小説であった。（作者は三浦綾子さんという、当時は無名の新人で、熱心なクリスチャンだった）その小説は非常に好評で、その後再びその続編として、「続・氷点」として掲載され、私も熱心に愛読したが、実はその中に出てくる一節である。

村上速水

ジエラール・シャンドリという人の言葉として出てくる言葉なのである。

それに続いて、

「ジエラール・シャンドリという人のいったこの言葉が、なぜか、しきりに頭に浮ぶと、おじいさんはおっしゃるのです。おじいさんはまた、自分の功績やら、名声ばかりを集めようとして、生きてきたようなものだった。お前にも、一体何を与えただろうと、おっしゃいました」

……「おもしろいものだね。あくせくと集めた金や財産は、誰の心にも残らない。しかしかくれた施し、真実な忠告、あたたかい励ましの言葉などは、いつまでも残るものだね」

……と、出てくる言葉なのである。

(二)

読者の中には、この言葉を読んで、いろいろな感想をいだくであろう。

「死んだのちのことなど、無意味なことだ。それよりも生きている間のことを問題にすべきだ」という人もあるかも知れない。しかしこの言葉は、よく注意して読めば、死後のことを問題にしているのではない。生きている今のわれわれの生きざまを問題にしているのだ。我々はいかに生きるべきか、を問うているのである。

「一生を終えてのちに残るもの」というのは、人生の総決算するときに、その人のねうちはきまる、ということに外ならない。

昔から「人間の本当のねうちは、棺の中に入ったときにわかる」とか、「棺桶に入ってみなければわからない」とも云われる。あの人は善い人だとか、悪い人だとか、いろいろの評価はあるが、よく考えてみると、それはその人の都合で云っているのであって、自分に都合のよい人は善人であり、都合の悪い人は悪人でしかない。そんな御都合主義で人間のねうちが決まるものであろうか。また「さるべき業縁のもよほさば、いかなる振舞もすべし」（歎異抄）といわれるように、人間はいつ、どこで、どんなことをしでかすかも知れない存在である。昨日まで善人であった人が、今日は突然悪人になるかも知れない。その無限の可能性を秘めている人間であるから、そんなことでは評価は決められぬ。

だから「人間のねうちは棺の中に入ってからわかる」といわれる所以であろう。その人の生前の行為の総決算によってきまるのであるから「一生を終えてのちに残るもの」といわれるのである。決して死後を問題にしているのではない。

(三)

そんなことを考えていたとき、偶然というか、奇縁というか、龍樹作の『十住毘婆沙論』の中に、ジエラール・シャンドリの言葉と、ほとんど同じ意味の言葉を見出した。

「我にあるものは我がものに非ず、ものを施し終って我がものなり」

短い文章であるが、この言葉を知ったとき、私はなぜか感激した。すでに東洋の聖者もこのことを知っていたのか、と。

話は前後するが、京大名誉教授の東昇先生は、ヴイルス学の権威であったが、特に原子顕微鏡の日本での開拓者として有名な人であった。それとともに稀に見る篤信な親鸞教徒であり、真摯な念仏者であった。先生は鹿児島県の出身であり、私は同郷の先輩として誇りにも思い、ひそかに私淑していた。ことに以前私が竜谷大学の宗教部長をつとめていた関係から、たびたび御縁をいただいて、報恩講や宗教講座などにも講演をお願いし、また個人的にも西大谷

での黎明講座にも拝聴したことがあった。いうまでもなく非常に博学であり、講演の内容にも説得力があった。だから私たち真宗人にとっては、かけがえのない外護者として、景仰措くあたわざる人であった。

ところが昨年十月二十六日の新聞紙上に、思いがけず先生の死が報ぜられ、その翌々日に京都の岡崎別院で葬儀が行われることを知らされた。私は何はさておき、ぜひ焼香したいと思い、当日は岡崎別院の葬儀に参列して焼香し、生前の深い恩義を謝した。そして帰宅してから、私の書斎にある先生の著書数冊を繙いて、在りし日の面影などを追憶した。その中の一つに『人間が人間になるために』という本があり、その中に次のような文章があった。

——真の自己創造への道——

人は自分を空しうしてこそ初めて自分になれる。まず、相手のために生き得て、はじめて自分のために生きる、自己を放棄して真の自己創造への道は拓ける。それは通常の価値判断の逆転により新しく開けてくる新しい価値の世界である。これなくしては、現代は現代を超克することはできない。

と。

「我ニ有ルモノハ我ガモノニ非ズ、モノヲ施シ終ッテ我ガモノナリ」（十住毘婆沙論）

私はこの言葉を発見したとき感激した。龍樹の「我に有るもの（所有するもの）」とは、ジエラール・シャンドリの「われわれが集めたもの」にあたり、「ものを施し終って」は、「われわれが与えたもの」にあたりはしないか。両者に共通するものは、金銀財宝や名聞利養など、常識的に我々が集めたものではなく、反対に親切、感謝、法悦という無形のものこそ、真実の宝としていることである。

(四)

そういう想念にかられることは、実に五年前、私が脳血栓に倒れてからのことである。主治医をはじめ、皆さま方の手厚い看護をいただき、有形無形の励ましの言葉を頂き、元気になってからのことである。これから何をなすべきか、何をもって御恩報謝すべきかを考える。

私の病気は大体順調に治りつつあるが、完全には治っていない、今も言葉がすらすら喋れないし、右手が不自由で思うように字が書けない。はじめはお経も読めなかったが、今では辛うじて新制『三部経』が読めるようになった。が、しかし法話は全然駄目である。法話は出来なくても文章が書けたらと思うが字が書けない。僧侶として法話伝道が出来ないことは致命的なことである。海から上がった魚のように残念だとは思うが仕方がない。「お蔭さま」といいながら、同時に「残念だ」という気持も拭いきれない、「有

難いことだ」と口ではいいながら、それ以上に愚痴めいた思いになってしまう。今まで当り前と思ったことが、話もすら〳〵いえず、字も思うように書けない。口と手で思うように表現することのできない私は、結局「集めること」も「施すこと」も出来ない自分であることも思って、暗澹たる思いになる。

(五)

そんなとき、私にかすかな希望を与えるのは、鍛テイ子さんの歌と行動である。

(一) 無碍の喜び
楽しき青春の日もしらず　病みて牀上十四年
絞りし血涙も今は早や　歓喜の涙と変じける

(二) ああ有難や不思議さよ
かなてこつんぼのこの耳に　名体不二の呼び声が
まちがわさぬとひびき入り　落魂を攝取不捨
ああ有難や不思議さよ

(三) 一声毎に現わるる　生きた仏のまぶしさに
いぶせき病室も美わしき　荘厳成就と変じける
ああ有難や不思議さよ

(四) ベッドの上に臥せしまま　翼拡げて法界の
無碍の世界を飛びまわる　世界一なる幸福者
ああ有難や不思議さよ

何という尊い歌であろう。私がこの歌詞を覚えたのは三十五、六年の昔。私が直接テイ子さんの二十五回忌に招待されて法筵を結んだのは、今から十三年昔、昭和四十五年三月十四日であった。

○

テイ子さんの生れたところを訪れたのは、福岡県粕屋郡篠栗町妙福寺であった。あの「無碍の喜び」の歌の生れたところは、さぞ真宗繁昌の地であろうと想像したが、何ぞはからん、八十八ヶ所めぐりの名所、弘法大師ゆかりの土地であった。人口約二万人。寺院数は二十五ヵ寺ぐらいあったが、真宗寺院はわずか二ヵ寺。

そういう環境の中で育ったテイ子さんは、昭和五年より背髄カリエスのため病床に呻吟し、自分で字も書けないような、寝たきりの病人であった。その遺稿の中に、「血涙十四年の病床生活は、随分苦しうございました、辛うございました。天地も裂けよとばかり慟哭いたしました」という言葉も見える。十四年間、どんなにか悲しく辛かったろうと思う。だからテイ子さんには「集めたもの」もなければ、「与えたもの」もない。ただ「ああ有難や、不思議さよ」だけの言葉が残ったと思う。

ところが私が訪ねた二十五回忌の法筵には、寒いみぞれの降る中を、遠近各地——山口、愛媛、熊本等から、本堂

一ぱいに、立錐の余地もないほど多くの人々が集っていた。テイ子さんが亡くなって二十五年。末代の不思議という外はない。

何が彼らを集めたのか。あの「ああ有難や、不思議さよ」のよろこびの声だけではないか。聞法のよろこびではなかったのか。

今の私には、数えを説くことも話すこともできないが、しかし教えを聞く――聞法だけが与えられている。そのたった一つの大切なものを大事にしたいと思うこの頃である。

――昭和五十八年四月『大乗』より転載――

○

「他力の信心こそ大菩提心」の終りの記事

（十四頁より）

このように、阿闍世は、他力の信心によって、まことの大菩提心をたまわったのでありました。

若き日、ここのところを繰り返し拝誦して、いかばかり感動したことでありましょうか。そして他力の信心とは、念仏申して立ちあがるということ、わがままでない、真の主体性をわがものにして、自覚的に立ちあがることであると、知らされたことでありました。

――昭和六十年四月三日、稿了――

自覚についての木村無相師の書信(二)

岩崎成章

さてここでもう一度はっきり聞いて頂き度いと思うことは「無信の者」ということは、凡夫というものは、谷内さんや無相といったような、如来さまのお目から見ての、悪衆生、邪見、無信の者。愚かな者にはホントーの意味の実生活の上で身についての「宿業の自覚」といったような、気のきいたこと、信者らしいこと、念仏者らしいことはとうてい一生自分の力では出来ないということが「無信の者」と云うことであろうかと私はいただいているのであります。それで「御廻向の真実信心」とはどういうことであろうかということであります。

『歎異抄』の「結文」のむすびの言葉の中で、法然上人が「源空が信心も如来よりたまわりたる信心なり、善信房（親鸞聖人）の信心も如来よりたまわらせたまいたる信心なり、さればただ一つなり」とおゝせられている。如来廻向の信心」「他力廻向の信心」「他力廻向の真実信心」とはどんなものであろうかということであります。私がもし「無信の者」でないならば、私の力でホントーの信心が出来るならば「他力廻向の信心」による必要はないのであります。もし私が自分の力でホントーの信心が出来るのなら、もし私が「無信の者」でないのなら、如来様は御信心を廻向する必要はないのであります。もし自分の力でお念仏一つしかないとか、お念仏一つとたのみに出来、信じられるようなら、自覚出来るようなら、如来様は「名号をえらびとりて、あたえたまえるなり」などせんでもよいのであります。ところが、ホントーの「信」も、ホントーの「行」も、ホントーの「自覚」もとうてい身について出来るヤツでないから、信心も、念仏も、自覚も、皆「南無阿弥陀仏」一つにこめて「お名号一つ」にこめて、「名号をえらびとりて、悪衆生、邪見、無信の者にあたえたまえるなり」であり、これを「知るべし」とおさとしあっても、私たちが自分に「あゝわかった、わかったというような知りようでは、一時的でスグどこかへ消えていってしまうものです。

その「知るべし」もナムアミダブツさま一つにこめて、「あたえたまえるなり」ではありますまいか、私達にはホントーの信心も、ホントーの念仏も、ホントーの自覚も、実際には身については出来ないので、それら一切をお念仏一つ、ナムアミダブツさま一つにこめて「あたえたまえるなり」「下さる」というのでないでしょうか。今現にすでに下さっているのではありますまいか。宿業の自覚でたすかるような人は「妙好人」であると思います。私のようなホントーの意味での「宿業の自覚」の出来ないものはホントーの意味の「宿業の自覚」が実生活の上で一生出来そうもない人間は、ホントーの意味の「機」の自覚も「法」の自覚も出来んまんま、ナムアミダブツさまを、本願名号正定業と聖人さまがおっしゃり「あたえたまえるなり」とおっしゃる。お名号さまを、ナムアミダブツさまを、お念仏さまを、称えられても、称えられなくとも、ナムアミダブツ、ナムアミダブツと、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツといただくほかはないのでありますまいか。

「宿業の自覚」というようなむつかしいことは、それが出来る先生方や、妙好人にまかせて、悪衆生、邪見、無信の者とお見抜きの、お見とおしの如来さま、ナムアミダブツさまにおまかせして、私はただこの身、この心、このクラシのまんま、ただナムアミダブツ、ナムアミダブツと、いただくほかないのであります。称えても称えられなくても、ナムアミダブツ、ナムアミダブツといただくほかないのであります。お浄土さまにまいれても、まいれなくても、ナムアミダ仏、ナムアミダブツとあおぎ、いただくほかないのであります。こういう私は、ホントーの意味での身についての「宿業の自覚」「煩悩の自覚」「悪性の自覚」「悪衆生、邪見、無信の者」と云う自覚、「お念仏一つ」「ナムアミダブツ一つ」という「自覚」はとうてい一生出来んようであります。この自覚の出来んまんま、たすけていただく、ナムアミダ仏、ナムアミダ仏といただく外はない私なのであります。

歎異抄第二章の「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおゝせをかぶりて信ずるほかに別のシサイなきなり。念仏はまことに、浄土にうまるるタネにてやはんべるらん、また地獄におつべき業にてや、はんべるらん、総じてもて存知せざるなり」ということも、親鸞はなんにもわからんのである。自覚といったことも出来んのである。浄土に生れるか地獄におつるかわからないが、ただ念仏してミダに助けられよという「よき人」のおゝせをいただくほかはない、ということなのでしょうねえ。

私としては「自分の自覚」「無相の自覚」といったことではなく、たゞ聖人の「釈迦如来、よろずの善の中より、名号をえらびとりて、悪衆生、邪見、無信の者に与えたまえるなりと知るべし」という聖人のお言葉をただいただいて、ただナムアミダ仏、ナムアミダブツといただくばかりで、自分としては「宿業の自覚」といった、ホントーの「機」の自覚も、念仏一つという「法の自覚」も自分としては、無相としてはまったく身についてないようであります。そしてホントーの「自覚」ということは「法」についても「機」についても出来ん自分であるということを日々、念々お知らせ下されてやまぬオハタラキを「廻向の真実信心」といただいていることであります。「無信の者」といえば徹底して「無信の者」である、ホントーの「自覚」などと云ったことは、一生できないということをどこまでもお知らせ下さるオハタラキが御廻向のご信心であるといただかれ、そのような一生、「無自覚の者」「無信の者」はただナムアミダ仏より外ないということをお知らせしてやまぬオハタラキが「御廻向の御信心さま」「智慧の念仏さま」といただいているのであります。

御和讃に

「智慧の念仏うることは法蔵願力のなせるなり
信心の智慧なかりせば、いかでか涅槃をさとらまし」

とあって、念仏も「智慧」、信心も「智慧」ホントーの「自覚の智慧」は如来様より外にない。ナムアミダブツより外にない。御信心さまよりほかにないと、私はいただかせてもらっているのであります。明日のいのちはわからん心臓病の私ですから、今日感じているままを「私流」「無相流」にかかせてもらいました。

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

弥陀の誓願のたのもしさ

花田正夫

源信僧都は出離生死の要道を求めて、御自身の頑魯に行き詰って、浄土往生の道一つとなられたが、決定信が得られず、遂に念仏上人として崇められていた空也上人を尋ねて、往生の得否をお聞きになった。上人はただちに「我は無知で知る力はないが、ただ智者（仏陀）の教によると、往生は間違いなし」と答えられると、感極って落涙千行万行であった。

法然上人は道を求めて三十年、自身の愚かさと拙なさに行きつまられた。幸に善導大師の観無量寿経の疏をひもとかれたとき、凡夫往生の道あり、とあることに身の毛もよだつよろこびの中に、八辺まで読み続けられ、「一心専念弥陀名号、行住坐臥時節の久近を問はず、念々にして捨てざれば正定之業と名づく、彼の仏願に順ずるが故に」の一句に「余が如き下機の行法は、仏かねて定めおかるるおや」と随喜されて「順彼仏願故」の一句身にしみたりとあたりに聞く人もなかったのに高声に唱えて、念仏門に入られたのであった。

両聖共に、弥陀の誓願のまことを聞かれて、信の旅が始まったのである。お誓いのついた本願、しかも衆生をたすけとげようための本願である、その確かさに安心せられたのである。

さて、A夫人は主人が所謂三代目で仕事に失敗し、他の女のもとに走ったので、女手で二人の子を育てていたが、宿痾のため死を前にされた時、御主人の電話で早速御見舞申すと、酸素吸入をうけ苦しい息の中から

「かねて罪深い者もお救いいただけるとお聞きしていますが、私は人様には奇麗な様子をしていますが、内心は人面夜叉です、女を呪い、主人を憎み続けてきました。こうした私でもおたすけ下さるでしょうか」とのお尋ねであった。私は即座に「人間同志の約束はどんなに堅く誓っても、まったが入りますが、仏の仰せにはまったがありません。仏語に虚妄なし、本願あに誤りあらんや、であります」と

お答えするや否や、両眼に涙を浮かべて、念仏されながら「ありがとうございました。この世では御礼も出来ませんが、お浄土からお礼をさせていただきます」と云われ、さらに「こんな血を吐く病人には、もうお見舞下さいませんように、病気をうつしては申しわけありませんから」とつぶやかれたのがこの世のお別れになった。

また、B夫人は、寺院生まれであったが、腎臓病が悪化して尿毒症をおこされた時、是非お会いしたいとの御申出にあい、驚いて御見舞申すと、

「今までは聞いたり、読んだりしたことを思い出してはよろこんでいましたが、今度の病気ですっかり忘れてしまい、今では仏様もわからなくなりました」との淋しい訴えであった。

御主人から、「病気が重いので、十分か十五分位の話をして下さい」と申されていたし、衰弱もひどく、お顔や手足にもむくみが見えた。いよ〳〵お別れだなと知らされ、短刀直入に、夫人の口からお念仏が時々もれているので、

「奥さん、お念仏が出て下さるではありませんか、お念仏が生き仏さまです！煩悩具足の私共はどんなにやってみても、仏を拝むことも、仏に近づくことも出来ませんが、こうした私共を、かねてお見抜き下さった仏様が、お念仏となって攝取して下さるのです。ナム、ナム、ナム」と申すと、ただ涙にくれて、心のやわらぎが顔にあらわれてきた。噫、誓願の不思議、御名をもって衆生を攝取して下さるたのもしさ、言語に絶するものがあった。

それから一週間後に亡くなられたが、その時に書かれた御礼状をあとで拝見すると、体力も衰えて、線と棒ばかりになったお手紙であった。然し、そこに浄土へ還られる後姿を拝し、襟を正さしめられた。

× × ×

昨年亡くなられた木村無相さんが、唯信鈔文意の中から特に「故使如来選要法といふは、釈迦如来よろづの善の中より、名号をえらびとりて、五濁悪時、悪世界、悪衆生・邪見、無信の者に与へたまへるなりとしるべし」を引かれて、わが身が、悪衆生、邪見、無信の者であると仏かねてしろしめされた上に、この者をもらさじ、捨てじとの御誓のあらわれの名号でましましたと、いまわのきわまで随喜し続けられたのであった。たすかるよすがも、信ずる力もない私共に、誓願を建立されて、名号をお恵み下さるのである。御誓のついた名号のたのもしさ、謝しても謝し尽くせぬものである。

あとがき

「天地に春は来にけり」で新緑風薫の好季になりました。本月もどうにか無事で編集を終り、十方を合掌しております。

近角先生は、御尊父の御往生を縁とされて、未来往生の味いを誌して下さいました。とかく仏語を頭で理解し勝ちな私共に、大鉄鎚を下されました。

五月は聖人の降誕の集いが催されますについて、池山先生の渇仰された聖人への信味を詳細にお述べ下さったものを頂きました。

西元先生は、法然上人から親鸞聖人が承けられた他力信心の至極を長文に及ぶ原稿をいただきました。御忙しい中を唯々御禮申すばかりであります。

村上速水先生は、本願寺の勧学、真剣な求道聞法の妙味を、大病を縁にしるされました。『大乗』から転載させていただきました。永観律師が「病もまた善知識なり」と表白されました故実も思い合わせました。

岩崎師は、木村無相師の書信をお述べ下さいました。こうしたことを御縁に無相師の導きを喜ばれる声があちらこちらから報ぜられます。念仏攝取の下に、自己の地獄必定の姿を徹底してお味い下さったものであります。

たすからぬ身にしみわたる御名の声

今次の大戦で戦死された無名戦士の母にとどけられた一句、助かるよすがのない身にそそがれる大悲の念仏をあらためて味わせていただきました。

御案内

五月十九日（日）午後一時半。南隣の鬼頭康彦様宅で一道会の例会をさせて頂きます。御忙しい時ながら御参会をお待ち申上げます。

定価 半年 八〇〇円（送共）
一年 一六〇〇円（送共）

編集・発行人 花田正夫
名古屋市南区駈上一丁目十四―二十九
電話 八二一局 七〇三七番

印刷人 坂部光雄
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所 慈光社
名古屋市南区駈上一丁目十四―二十九
振替口座 名古屋 六―一〇四七〇番
郵便番号 四五七

慈光 第三十七巻第五号 昭和六十年五月十五日発行 （毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可